



事務所 伊那市西町5016-2 Tel(72)0077 例会日 毎週木曜日 例会場 くぬぎの杜 Tel(78)1121
 会長 唐木一平 幹事 唐木 章 会報委員長 大石ひとみ 第2874回例会 2019.7.18 No.1534



2019-20年度 RI テーマ

Rotary Connects The World

ソング 我等の生業**ビジター・ゲスト紹介**

伊那中央 RC 会長 唐澤千明様、幹事 市川修次様

会長談話 唐木一平会長

梅雨時のうっとうしい日々が続いております。長雨・低温で会員の皆様も日々の生活に、お仕事に不都合を感じておられるのではないのでしょうか。



今日は地球温暖化が農業に及ぼし始めている悪影響についてお話しさせていただきます。暖冬、猛暑、ゲリラ豪雨、竜巻、どれをとっても少なからず温暖化が要因となっていると思われます。

作物は平均気温が 0.5 度上がっても大変なストレスを受けるものです。ご存じの通り伊那谷南部における名産の果樹、特にリンゴの栽培に影響が及び果樹農家は転作を余儀なくされております。ブドウの産地甲府市においても、ワイナリーまでも移設を始めております。もちろん米作りも同じです。今年の遅霜と日照不足で、土用干しという土に干し割れを作りガス抜きをする工程が出来ず困っております。伊那地方では、美味しいコシヒカリ米を出荷している訳ですが、近い将来気候にあった新種での稲作となる事でしょう。日本の食料自給率は 50%にも達していませんが、今、減反政策で作付け可能な水田の 3 割近くを休耕田としなくてはなりません。農業政策・温暖化対策等に今私たちの出来ることは何か、改めて考えさせられる今日であります。

ご挨拶

伊那中央 RC 会長 唐澤千明様

今年度は、60 周年おめでとうございませう。伊那中央 RC は 30 年過ぎたところですよ。



私は飲食業を営んでおり、30 店舗が加盟するローメンズクラブに入っており、先日、5 人で三日町の老人施設でローメンを振舞ってきました。伊那市を知っていただき、ローメンを知っていただく活動をしてきました。今日の午前中は先日市議会を傍聴した伊那西高校の 4 2 名の生徒たちと意見交換してきました。高遠からの通学交通費が高いことや女性議員が少ないこと、将来地元に戻ってくるには地域をどのようにしたらよいかなど意見が出ました。前回の選挙は無投票でしたので、改革と含め頑張っていきたいと思っております。今後とも、よろしく願いいたします。

伊那中央 RC 幹事 市川修次様

唐木会長、唐木幹事にはロータリークラブに入る前からお世話になっており、誘われていましたが、私は伊那に二つのロータリーがあるのを知らずに、当社の創業の小沢が中央ロータリーに入っていましたので、その流れで中央に入ってしまった。今後とも、お世話になりますが、よろしく願いいたします。

**幹事報告** 別紙をご覧ください。

出席報告 会員数 56 名 内出席免除 17 名
 長欠 0 名 出席者 30 名 事前ミーティング 0 名
 出席率 68.75%

ニコニコボックス

唐木一平、唐木 章 伊那中央 RC 会長唐澤千明様、幹事市川修次様良くお越しくございました。ごゆっくり楽しんでいってください。

前澤朋欣 本日卓話をさせていただきます。宜しくお願い致します。

塚越 寛 昨日、さつき亭で今年初めてのヒグラシの声を聴きました。

神山公秀 長い間留守にしており、欠席しました。

会員卓話 前澤 朋欣会員

演題 - 「最近の葬儀事情」 -



現在、発見されている歴史上初めての葬儀跡と言われている物が、約6万年前と言われるイラク北部にあるシャニダール洞窟でネアンデルタール人の骨が見つかっており、その周辺にはこの洞窟から見つかるはずの無い花粉が見つかっています。これは死者を弔うための花だそうです。

日本の葬儀の大部分は仏式（葬式仏教）で行われております。1635年（寛永12年）頃、日本人全員を近くの寺に帰属させる寺請制度が始まり、1700年（元禄13年）頃には、位牌、仏壇、戒名といった制度が導入され、葬式に僧侶がつくようになった。江戸時代五代将軍徳川綱吉の時代、約300年前、今の仏式と言われる葬儀が確立してきたと言われております。葬儀の後に火葬場や埋葬地まで葬列を組み、故人を送っていくことを野辺の送りといいます。野辺とは埋葬の意味です。かつては、自宅で葬儀を行い、遺体の埋葬や火葬を行う場所へは、親族や地域の人が、棺桶を担いで移動していました。

明治時代までの葬式は、死者を墓地へ送る行為が葬儀の目的です。町奉行所からも、派手な葬送を控えるよう規制をかけるほどでしたが、白昼堂々と見せびらかす為の葬列や会葬者への接待など、町民の葬儀に対する熱い思いが史料に残されています。そして、町だけでなく村でも同様に、派手な葬送が行われていた史料が残されています。葬具業者の誕生、現在の葬儀業者とは異なり、当時は輿屋[こしや]や棺屋[かんや]と呼ばれ、輿や棺、提灯を作って喪家へ販売する葬具業者でした。その2つの業者が互いを兼ね合いだし、やがて葬儀の進行や故人の搬送、式場の運営など、トータルで葬儀を請け負う、現在の葬儀業者が誕生しました。

明治になると、政府は幕府と結びついた仏教勢力から特権を奪い、仏教的要素を排除する必要がありました。その後、寺院では廃仏毀釈や寺受制度の廃止などで、大きな経営基盤を失い、現在では、小さな末寺[まつじ]の消滅がメディアに掲載されるようになりました。明治初期から墓地や埋葬に関する施策を繰り返し、明治17年に「墓地及埋葬取締規約」が誕生しました。この時から、葬儀の手続きに必要な死亡診断書や火葬許可書

が発行されるようになります。また、仏教葬儀だけでなく神道式の葬儀も行われるようになりました。明治に入っても、重要視されていたのは、葬列の華やかさです。さらに、食事や返礼品が足りないのは恥とされ、必要以上に注文するので、葬式は高額化していきました。しかし、大正期になると交通手段が発達し、物理的に葬列が進行できなくなり、人々の間で長い距離を歩く習慣がなくなりました。そして、霊柩自動車も登場し徐々に距離の長い葬列が廃れてゆきます。現在では、その名残として出棺の際に、短い距離ですが、ご遺族・ご親族、その他の会葬者が棺と共に連なって歩きます。

昭和になると、これまでの葬列に代わり自宅での告別式が流行りだし、通夜と共に、葬儀・告別式も自宅が会場となります。大正までは、葬列の規模が故人の経済力や喪家のステータスでしたが、今度は自宅に飾る祭壇の豪華さが、それに代わりました。初期の頃は白い布をかけた3段程度の白布祭壇でしたが、高度経済成長期には、豪華さを売りにした多様な祭壇が開発され、現在にいたります。葬列を行っていた時では、「みんなで故人を家から火葬場（墓地）まで送る」ことが葬儀の目的でした。しかし葬列が無くなると、葬儀会場で葬儀を行うので、その目的は故人とお別れをする為や、滅多に合わない親族が集まる機会として変化しました。バブル崩壊や少子高齢化により、葬儀自体への価値観が変わってきます。人を必要以上に招かない【家族葬】が人気となり、やがて通夜や葬儀などの儀礼を省略した【1日葬】や【直葬】も増え、都市部ではそれらが一般化しました。かつては一部の富裕層が民衆に見せびらかす為の葬儀、少しでも見栄を張りたいという人々も多かったそうですが、今は「どうやって知らせないか…？」に気を遣う方々のほうが多くなってきてと言われております。2000年頃まで閉鎖的だった葬儀の世界が、インターネットの普及によりオープン化され、色々な選択肢を持つことができるようになりました。

宗教的には菩提寺を持たないことによって、葬儀や墓の制限が無くなるので、選択の幅が増える要因になりました。次の世代でも生者によって葬送・墓制が変化していくでしょう。

何かありましたら、お願い致しますと、言いにくい業界ではありますが、今後とも宜しく願い致します。